

# ぶどうの木

2011年8月  
第94号  
聖アウグスチノ  
カトリック葛西教会

東京都江戸川区中葛西1-10-15  
03-3689-0014

上にあるものに心を留め…

主任司祭 ヘスース・ダーニョ神父

日本の夏と言えば、夏休み、盆踊り大会、花火大会、サマーキャンプなどの活動が皆の楽しみです。他は、第二次世界大戦の終了（終戦記念）と原爆の記念、お墓参り、平和祈願の式などの行事が厳粛な気持ちで夏の間に行われます。カトリック教会では、八月に聖母被昇天が祝われます。聖母マリア様が天に上げられた祝日です。日本ではマリア様の祝日はごミサとパーティーで大きなお祝いです。

この聖母マリアの祝日は、キリスト教的な私たちの生活に直接的に関連しているでしょうか。信者の皆さんの熱意のあるその活動を見ると、聖母の被昇天の祝日は私たちの生活に大きな関係があると思います。

マリア様は神さまからいただいた高い身分を持っているので、私たちはマリア様をたたえます。しかし、恵みがすでに溢れすでに祝福された方なので、マリア様は私たちのたたえがまだ要るのでしょうか。私たちがたたえることより、私たちの祈りをマリア様はもつと喜ぶと思います。なぜなら、罪深い私たち

はまだ聖なるものではないからです。私たちはたくさんの悪で心を汚しがちです。私たちが悪口、妬み、傲慢という悪犯したら、私たちが属している家庭や職場や共同体や世界などでの平和はどうなるでしょうか。

第二次世界大戦では、長崎と広島で原爆が落とされ、亡くなった人、犠牲者、被爆者、浦上天主堂の聖母の被昇天のご像が被爆マリア様となった恐ろしい出来事は、人間のいじめや憎しみや暴力の結果ではないでしょうか。戦争で無差別に殺した人間の生命の尊厳を尊敬しない場合は、人間の悪ではないでしょうか。

人間の心を見ると、また私たちの属しているグループの人間関係を見ると、今日祝っている聖母の被昇天の祝日は誰のためでしょうか。それは恵みがまだ深くない人や祝福されない人のためだと思います。それは、平和祈願祭の中で平和を願ったように平和のない人のためなのだと思います。

この大きな集いはマリア様よりも私たちのためなのだと思います。私たちは時々弱い信仰を持って忠実ではないかもしれませんが、マリアさまを大切にすると共に、私たちの救いのためにも「私たち罪びとのために、今も、死を迎える時も、お祈りください。」と祈りを聖母の取次ぎによって捧げましょう。

最後に、聖母の被昇天は私たちがキリスト者としての未来に関係があります。最後の晩餐の時、「行ってあなた方のために場所を用意したら、戻って来てあなた方を私のもとに迎える。こうして、私のいる所に、あなた方もいることになる」とイエス様は弟子たちに約束されました。



## 聖アウグスチノと召命

トマス小崎 柴田弘之

「召命」という言葉で、私たちは教会生活のある生き方（司祭職や修道生活など）を選ぶことを普通は連想します。確かに私もミサを司式する神父様たちの姿を見て憧れを持ったことがありますし、熱心に祈り人々と交わって奉仕するシスターやブラザーたちの姿にキリストを重ねて、「もしかしたら自分にもこの道があるのでは」と神学校や修道会の門を叩く人も多いことでしょう。

でも「召命」とは本来何らかの出来事を通して心が疼くような霊的体験をし、その結果私が神に「呼ばれている」との思いを抱くことから始まっていく私たちの信仰の歩みを表しています。きっかけとなる出来事も呼ばれる先も人それぞれでしょうが、この霊的な体験こそが、単なる漠然とした憧れから具体的な生き方を選択する決断へと私たちを追い立てるのでないでしょうか。私たちはよく具体的な生き方（司祭職など）を指して「召命」と呼んでいます。が、「霊的な疼き」の部分に関しては心の内奥での体験であるだけに、言葉で人に伝えることも難しく、出来事を語ることでなんとか聞く人に（それぞれの人生体験に照らして）「感じてもらう」ことしかできない類のものです。

こうした霊的な疼きを実に表現豊かに語っている聖人の一人がアウグスチノでしょう。若い頃のアウグスチノは信仰に熱い母親への反発もあり、司祭への憧れどころか教会や聖

書に魅力を感じることもない、知的好奇心に溢れる一人の青年でした。司教になって間もない頃にそれまでの人生を振り返って書かれた『告白』の中には、彼が通った諸々の出来事とそれが生んだ豊かな霊的疼きが数多く記されています。中でも彼が二十歳の頃に経験した親しい友人の死がその心に深く刻まれたことは間違いなく（第四巻四〜六章）、神のもとでの安らぎを追い求めるアウグスチノのその後の人生を方向付ける出来事だったのではないかと私には思えます。

このような心の疼きを刻み込むような、特につらい出来事は、望んだからといって与えられるものではなく、誰も自ら望んだりはないものです。人生の中で起こりうる挫折、喪失体験、不条理で残酷な出来事、また人の心の闇を見るような体験。こうした出来事を通して恐れにさいなまれ、心が頑なになり、立ち上がれなくなってしまう人が多い中で、どん底から神に向かって叫び声を上げ、手を差し伸べてくださる救い主に出会っていく人たちがいる、ということも人間の歴史は証しています。真に「主の呼びかけ」に応えることができるためには、自己中心的で罪深い私たち人間には相当の霊的な疼きの体験が必要なのかもしれません。しかしそう言いながらも、「（特に私を）試みに遭わせないでください」と手を合わせて祈っている小さな自分があります。み心のままに、とおゆだねする勇氣を願いたいのです。

## 被災地ボランティアに参加して

チャリー・ポムセノ神父

カトリック東京国際センター（CTIC）による、東日本大震災の被災地での食料および心のケアを目的としたボランティアプログラムに参加してきました。

被災された方々、特にフィリピンコミュニティとそのご家族に対して食糧を提供しているこの活動グループの趣旨は、「食糧Ⅱからだのための栄養」と共に、「精神面のケアⅡ心の栄養」を被災者の方々に届け、またプロによるカウンセリングによって「身体の飢え」だけでなく「心の渴望」をいやして行くこうというものです。

支援活動は午後3時半に聖体祭儀で締めくくられました。私も岩手教区の司祭、ボランティアグループの担当司祭と共にミサを捧げました。ごミサの後は食事を共にしました。ごく簡単なものでしたが、喜びをもって分か合うことができました。

今回のボランティア活動の一番の目的は、被災地の兄弟姉妹たちに、このような大きな悲しみ、苦難、孤独の中にあっても、「あなたがたは決して一人ではないのだ」と伝えることでしょう。今彼らにとって一番必要なことは、「自分たちに心を寄せ、祈ってくれる兄弟姉妹たちがいる」と感じるることなのです。

ボランティアの仕事は大変ではありませんが、助けを必要としている人々のお役に立つことが出来る、非常に素晴らしい体験でした。大変な時期である今こそ、私たちの信仰を見つめなおし、カトリックという信仰の深さを改めて感じるこのことができる素晴らしい機会ではないでしょうか。

## 東北でのボランティア活動に参加して (その一)

使徒ヨハネ 松尾 太

宮城県石巻市のカリタスジャパン石巻ベースにて、5月と6月に1度ずつ計12日間、ボランティア活動に参加させていただきました。石巻ベースでは、歩いて5分の中学校にもつけられた避難所でのお湯出しを主として、ボランティアの人数に余裕がある時には、社会福祉協議会(社協)を通して、また、石巻ベースが個人的に依頼を受けた個人宅などで、泥出しやがれき撤去、片付けなどの活動をしています。ボランティアは石巻教会に場所をお借りして、そこで協働生活をしながら、活動が続いています。わたしは、この協働生活をしながら、というのが、とても教会らしいと感じます。

ベース設立後、石巻で4月以降にベース長を努めているのは大阪教区から派遣されてきた青年たちで、わたしが滞在していたときは、越知さんという21歳の青年と、濱田さんという22歳の青年にお世話になりました。彼らは通算でひと月以上石巻で活動しています。彼らは、お湯出しをしている避難所の方たちからの信頼も厚く、毎日入れ替わり立ち替わり石巻を訪れるボランティアのお世話も非常に細やかで、ボランティア、避難所、双方のコミュニケーションを盛り上げていました。

避難所のお湯出しは本当に大切な仕事で、5月の時点では、毎朝6時10分頃から火を入れて、6時半からお湯出しを始めて午後4時まで、テントでお湯を提供していました。6時半には既にポットが3列くらいの列を作っています。お湯の需要は7時頃までが

もつとも多く、次に夕方3時頃から朝よりは少ないですが2度目のピークを迎えます。

午前と午後のピークの間の時間は、仕事や学校に行く人がいるため人が減り、お年寄りや仕事をなくした方や幼い子どもたちが、用意してあるインスタントの飲み物の所に集まってコーヒーやお茶を飲みながら、ボランティアを交えている話をします。たいていは他愛もない世間話ですが、時折、ふと3・11当日のことを話してくださる方がいます。警報が解除されればまたすぐ家に戻れると思っただけで何も持たずに出て来たら、家も持ち物も全部流されてしまったと、涙ぐみながら話してくださった年配の女性や、2人のお年寄りを担いで逃げたが、1人が流れて来た木に押されて、手を離してしまったということをとっても悔やんでいる男性がいました。避難所の生活が長期化してきて疲弊しており、さらに仕事もなくしてしまった人たちは、なかなか前向きになれないという状況があるように感じました。

夕方になると、子どもたちが学校から帰ってきます。子どもたちと遊ぶのも、ボランティアの大切な役割だということを、子どもが大好きで、子どもたちからもよく信頼され愛されている越知さんは話していました。子どもたちはとても元気で、お湯出しのテントから外に出ていると遊ぼうと誘いにきます。そういうときは、他のボランティアや、いつもお湯出しのところにいる1人の避難所で生活している18歳の青年といっしょに、鬼ごっこやドッジボールなどをして遊びました。名前を聞いてもいたずらっぽく笑ってなかなか

教えてくれない子が何人かいましたが、わたしが会った子たちはほとんど人見知りもせず、屈託なく笑い、元気いっぱいでした。お湯のテントに入っただけとはいけないとか、ボランティアの人間に入れ替わりがあることなど、小学生の子たちはよく理解していて、短期で参加したボランティアの顔もよく覚えており、リーダーとして訪れているボランティアが来ると、とても喜んでいました。

2度目に参加したときの最終日、お湯は4時で終わりなのですが、最後かもしれないと思い、6時近くまで数人の小学生の子たちと走り回っていました。泥んこになって一緒に遊び、もうそろそろ帰ろうと皆で手足を洗っていたとき、一応伝えようと思い、「今日で最後っちゃん、また戻らんばいけん」と言うのと、さっきまで、わたしの背中を泥足で蹴っ飛ばしていた子が、泥だらけのわたしの背中を何も言わずにタオルで拭ってくれました。

子どもたちは、表立ってはあまり見えませんが、3月11日以来、おそろく相当なストレスを抱え、またこれからも抱えていくのだろうということを、あらためて察せられました。

一方、泥出しなどの作業にも、計5度参加させていただきました。家や職場がなんとか残り、なんとか生活を再建しようにも、個人や家族だけではなかなかかかどらない作業を手伝わせていただくのは、とてもやりがいがあります。個人のお家の床下に新聞を敷いたり、醤油工場の泥出しをしたり、畑の表面に積もった汚泥をかき出したりしました。

(次号へ続く)

## 福祉部の紹介

バルトロメオ 平 源一

福祉部構成メンバー(担当者)は、

- 一、教会を頼って来る小さい人々への対応  
・三十二名が交替で。
  - 二、特別養護老人ホーム暖心苑の支援  
・七名が交替で。
  - 三、共働学舎支援・一名で。
  - 四、外国の恵まれない子供達への支援  
・二か国に各一名ずつ。
  - 五、日曜日のコーヒー当番  
・十五名が交替で。
  - 六、福祉部会計・一名で。
- の皆様のご協力で成り立っております。  
これ等の具体的な内容に付きましては、  
一、教会を頼って来る小さい人々への対応  
(担当者: 渡部 順子)

支給方法: 土・日・祭日を除く毎日の11時から正午までに来た小さい人々は、玄関テーブルにある用紙に、順に氏名を記入する。  
原則的に、二名一組の当番者は、記入された氏名を呼び出して、準備されている弁当を手渡す。

福祉部の朝ミサチームの方々は、ごミサで主に賛美を捧げ、その足で、当日の支給弁当の準備をして下さいます。

これ等一連の作業は、福祉部活動の中で、金銭的にも、労力的にも、最も大きな部分を占めています。

この作業は、教会が松江地区から現在の場所に移転した初めの頃、シスター方が務めておられたが、不定期で人数も少なかった。

しかし、2000年になると、徐々に増え始め10年後の昨年実績は、7、248人となりました。

給食作業が、25年間にわたり継続しているのは、偏に資金を寄付下さる方、食料品を寄付下さる方(聖母被昇天会のシスター方・柴田耕作様他)、忙しい中、車・労力を提供下さる方々のお蔭であります。併せてご指導下さいました小岩保険所、葛西警察署、区役所、それに実地指導下さった西村信次様に感謝!

### 二、特別養護老人ホーム暖心苑支援

(担当者: 井戸 晶子)  
暖心苑開設当初、カトリック信者の方が入所しておられたことから山口正美神父様が通っておられたので、介護支援が始まった。  
数名でチームを組み、車椅子の介助・風船渡し・フラダンス・洗濯場の手伝いなどが継続されています。

### 三、共働学舎支援

(担当者: 福井 滋子)  
身障者の方々が自立するために、古紙から再生紙を製造しておられるが、古紙100%を使用のため、製品品質が良くなく販路に窮し在庫品が多いと伺い(シスター古賀綾子)、現場を見学した上で支援を決定。現在も常時在庫品があります。犠牲的精神でご利用を。

### 四、外国の恵まれない子供達への支援

①ネグロスの恵まれない子供達への支援

(担当者: 金城千里)

福祉部として、ネグロス双葉会を通して年一回送金しております。

②ポリビアの恵まれない子供達への支援

(担当者: 新妻江く子)

エルピス会野原昭子様「ポリビア」支援は、ご本人が帰国の際葛西教会にてポリビアの実情をお話しされ、その日に支援の会が結成され、新妻様が担当して下さり、2003年9月7日に支援が開始され現在に至っております。日本国内の取りまとめは、福岡の依 靖子様、務めておられます

### 五、日曜日のコーヒー当番

(担当者: 能登政子)

日曜日の主日ミサのあと、トマスホールで分かち合い用にコーヒーを当番に当たっている方が準備する。一杯 100円で、これは福祉部の唯一の活動資金となります。

### 六、福祉部の会計

(担当者: 能登政子)  
出納は、日曜日が主体になるので、事前に申し出を要します。

会計担当者は、申し出により準備し、相手と連絡を取りながら遂行します: 一般の会計と同じ。

福祉部の現状は、概略以上の通りで、いつもお手伝いの方を募集しております。月に一度でも結構です。

よろしくお願ひします。

## 洗礼を受けて

ヴェロニカ 黒澤恵子

今年の復活祭には、私と他に五名の方達が洗礼のお恵みをいただくことができました。

大変嬉しく思っております。今まで温かく見守って下さいました葛西教会の皆様、そして二年近く聖書の分かち合いをしていただきましたシスター伊東に、心から感謝と御礼を申し上げます。

私が、葛西教会を初めて訪れましたのは、今からおよそ二年前になります。突然のことでしたが、柴田神父様に電話を致しました。(当時は、葛西教会の主任司祭でいらっしゃいました)

そして、一度お会いして、私の話を聞いていただきたい旨をお伝えすると、お忙しい中、快く承諾して下さいました。私はあの日、教会の中で初めて神父様にお目にかかった時の感動を、今でも忘れることができません。あの時は、胸が一杯になり、しばらくの間涙が止まりませんでした。それはまるで、神父様を通して、イエスさまがそこにおいでになられるように感じられたからです。

自分の十字架を背負い、ひたすらイエス様に救いを求めて教会の門を叩いた私を、慈しみ深い主キリストは、やさしく受け入れてくださいました。

そして、二年近い時が、一步、一步、少しずつですが確実にイエス様に近づいていることを、実感できるようになりました。ですから今日までの時間は、私にとって掛けがえのない、とても貴重で大切な時となりました。

改めて、この喜びを忘れることなく、お導きをいただいたイエス様に、心から感謝を申し上げます。

皆様、これからもよろしくお願いいたします。

(黒澤さんは、引き続き七月三日、市川教会で岡田司教様より、めでたく堅信の秘跡を受けられました)



黒澤さん (二列目 中央)



## 洗礼を受けて

洗礼を人生の転換点にしたい

ミカエル 姜敬元(カンチャンウォン)

私は今年の復活祭に洗礼を受けた姜敬元です。韓国の教育科学技術部で働いている公務員で、2009年9月から2012年3月まで早稲田大学のMBA課程で勉強しています。私は今年42歳で、人生というマラソンの中間返還点に立っているような感じですが、今までは仕事がいという口実で、周りの人あまり配慮しなく仕事ばかりしたような気がします。それで、私はこれからどう生きて行ったら良いのか色々考えた末、葛西教会に通って洗礼を受けることにしました。それは、私の両親がカトリック信者である影響もありますが、私自身がカトリック教会では何となく聖なる雰囲気を感じることに、日本での一人暮らしが寂しかったことも働いた結果だと思えます。

一年以上日曜日の9時に教会に来て、カテキズムを勉強してミサに参加しましたが、毎週ミサに参加して自分のことを反省し、心を清めることはとても良いことだと感じました。また、それは、私にとっては凄く日本語の勉強にもなりました。柴田神父様の説教は発音がアナウンサのように明瞭で、イエス神父様のゆっくり話す話し方もとても分かりやすく、日本語が下手な私には本当に助かりました。カテキズムの勉強で学んだことで、マタイ7・12にある黄金律「人からしてもらいたいと思うことは何でも、あなた方も人にしなさい」は、正に人間関係にとって不変の真理だと感じました。これからは、他人から求める前に私自身が他人にしてあげようと思えます。

最後に、毎週日曜日、朝早く教会に来てカテキズムを親切に教えてくださった脇谷さんに心から感謝の言葉申し上げます。どうもありがとうございました。

## 洗礼と初聖体を受けて

アシジのフランチスコ 柏木 栄郷  
クララ 柏木 美香

私達夫婦の、洗礼と初聖体のお恵みにあづからせていただいたイエス様と柴田神父様に、感謝します。快く代父母を引き受けてくださった佐々木様と平様と、葛西教会の信者の皆様のおかげと思っております。とても大切な主の昇天の祝日に当たり、晴れ晴れとした気持ちであづからせていただき、本当にありがとうございました。

これまでの数年間、柴田神父様には、根気強く教えていただき、大変ありがたく思っています。平様には、とても素敵なお話をいただき、あらがとうございます。

洗礼についての感想ですが、聖水を結構たくさん受けたので、驚きました。そして洗礼盤に金の貝殻が浮いていたのが、とても美しかったです。

初聖体をいただいた時、これがイエス様のお体なのだ、何て幸せなんだろう、と思いました。このお体が、十字架に架けられて死んだイエス様。人間イエスの体が亡くなったとしても、神の子として永遠に生きるイエスのお体。カトリック教会共同体の一員(信者)になれて、幸せです。イエス様が、身近に感じるようになりました。



心が、湧き踊るような気がします。  
葛西教会の信者の皆様、あらがとうございます。私達も、これから洗礼を受ける方々の為に、お祈りしてまいります。

## 洗礼と堅信の恵みを頂いて

ステファノ 上野 達  
マリヤ・マキシミリアナ・コルベ 仙子  
パウロ 祥

福であったのだと思います。

### 1 私と息子の洗礼

私と息子様は、今年のご復活祭である4月24日、柴田神父様により洗礼を授かりました。

私の妻は、2005年に洗礼を受けたカトリック信者であり、結婚したとき私は未信者でした。結婚後、教会のミサにあづかったことはありましたが、洗礼を受けようと思うこともなく、生活を続けておりました。

しかし、2010年1月、洗礼を受けることを決意し、脇谷善之さんの入門講座を受け始めました。洗礼を受けるきっかけを一言で説明することはできませんが、妻から洗礼を勧められていたこと、それに伴いカトリックの教義を学んでみたいという気持ちを抱いていたところ、初めての葛西教会に訪れたときに、「今日、初めて来られた方のご紹介です」と皆様に温かく迎え入れられたこと等がきっかけになったのだと思います。

今思えば、聖霊による導きがあったのだと思います(未信者であった当時は気付くことができませんでしたが。)

入門講座を受ける以前の私は、土曜に夜更かしをして日曜は遅くに起きるような生活をしていました。しかし、講座を受け始めてからは、日曜の朝に聖書を学ぶ規則正しい生活に変わりました。1年という入門講座の期間も聖書・聖伝を学ぶにはあまりにも短い期間でしたが、なんとカジェス神父様による最終口頭試問に合格して、無事洗礼式を迎えることができました。

洗礼式は、幸福感に包まれたものでした。同時に幼児洗礼を受けた息子様(当時1歳6カ月)も、額に水を注がれたときに満面の笑みを浮かべておりましたので、きっと私と同じように幸

### 2 私と妻の堅信

妻は、6年前に洗礼を受けましたが、堅信は受けておりませんでした。そこで、私と妻は、7月3日、市川教会にて岡田武夫大司教様により堅信を授かりました。

私は、洗礼と堅信を受けたことで、ミサにあづかり、信仰を深めていく決意を新たにいたしました。妻も、堅信を受けてから、不思議と以前に増して祈りたいという気持ちが強まったそうです。そして、毎日の祈りを通じて、自分自身の感情に振り回されることが少なくなってきた気がすると申しております。

私たちはこれでカトリックの入門の秘跡を終えましたが、これは、信仰生活の始まりにすぎません。

キリスト者として未熟な私たちですが、どうぞ皆様、これからもよろしくお祈りいたします



## 初聖体を受けて

教会学校3年 モニカ日下 瞳子

わたしは、2011年5月8日に初聖体を受けました。

神父さまの前では、きんちょうしないで上手にご聖体をいただくことが出来ました。初めてまっ白なご聖体が手にのった時は、どんな味がするのかわかりませんが、とてもやわらかく、すぐに口の中でとけてしまい、味がよく分かりませんでした。でも、本当に神様の子どもになれてうれしかったです。

これからも、もっと神様のよい子どもになれるように毎週教会にかよい、たくさんご聖体をしていただきます。

## はっせいたいのかんそう

ヨゼフ 水越 功

ぼくは、さいしょ「はっせいたい」というのはどういうことをするのかと思いました。そして、教会学校で「はっせいたい」のことをべん強して、「はっせいたい」をうけたら、イエスさまのパンがもらえることを知りました。だからとてもドキドキして「はっせいたい」の日をまっせいました。

はっせいたいをうける時はとてもきんちょうしていました。はっせいたいをうけてから、イエスさまのパンをもらう時、どんなあじがするのかわかりませんでした。イエスさまのパンを食べてみたら、何のあじもしませんでした。

パンを食べたらイエスさまといっしょにいるような気がしてとてもうれしかったです。



韓国人信者世話人 金鍾信 (家族)



## わが家族の信仰の恩人

韓国人信者世話人 ヨアキム 金鍾信キムジョンシン

わが家族が東京入りしたのは、今から丁度2年前の出来ことだった。

柴田神父様が主任の時、ミサ後はわが家族が紹介された大きな拍手の中で歓迎を受け、主任神父様、シスターたちそれに今の会長である本橋夫妻をはじめ多数の韓国人信者らと挨拶をかわした。しばらくして、行船公園内のある茶屋で催された中葛西地区会では、わが夫婦を新しい地区会員として仲間として温かく受け入れてくれた。

ところが、わが夫婦が必ずせねばならないことが一つ残っていた。それは2001年この世を去ったシスター渡辺智子の墓参りであった。

わが家族が1997年から2001初春まで通っていた福岡教区の箱崎教会時の物語である。

当時彼女は北九州のある修道院所属の老人ホームで働いていたが、日曜日ごとに六十キロもある教会まで来て韓国人信者らの信仰生活を支えてくれたのだ。ミサ後には当日の福音の内容を分かりやすく説明してくれ、四旬節及び待降節になると韓国人神父様を招き、告解の機会も作ってくれた。長崎の聖地にも連れて行っていただいたこともある。

わが家族が韓国へ帰国したのが2001年3月で、その後間もないうち、シスターはミサ中突然倒れてそのまま不帰の客となった。彼女の活動が韓国領事館にも伝わって、2002年には大韓民国大統領より勲章が遺族に贈られたそうだ。

2009年夏のある休日、遂にわが家族は府中にあるカトリック墓地へ行って、墓碑に刻まれている彼女の名前を見ながら献花とお祈りを捧げた。

その場で私は彼女のご遺志を肝に銘じて、箱崎教会時節のよつに葛西教会でも韓国人信者達の世話役として、かつ教会の為、自分なりの役割を探し努めて行こうと硬く誓った。